ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.3 March 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

3

CONTENTS

- 巻頭言
  人材と人財、または人物
  ／高見宇造 1
- 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～（47）
  第６章　吉本隆明と『思想のアンソロジー』⑥
  ／井上昭夫 2
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（15）
  戦前のハワイ伝道と日系移民社会 ⑤
  ／尾上貴行 3
- 「おふでさき」の標石的用法（31）
  動詞について ⑯
  ／深谷耕治 4
- 「おさしづ」語句の探究（28）
  「おさしづ」第３巻における「本席」と「道」
  ／澤井治郎 5
- 現代世界に生きる「人間」と「宗教」―再考―（３）
  人間はどこまで動物か ②
  ／岡田正彦 6
- 遺跡からのメッセージ（32）
  イスラエルの遺跡調査⑯ 遺跡と文化遺産マネジメント
  ／桑原久男 7
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（16）
  植民地社会の同化と抵抗 ②
  ／森　洋明 8
- 図書紹介（103）
  『しあわせの宗教学―ウェルビーイング研究の視座から―』
  ／金子　昭 9
- 思案・試案・私案
  天理市街地のイチョウ並木について思うこと ②
  ／佐藤孝則 10
- English Summary 12
- おやさと研究所ニュース 13

  出張報告（堀内みどり）／第 307 回研究報告会（島田勝巳）／第 308 回研究報告会（渡辺優）／『グローカル天理』年間購読のご案内／『グローカル天理』合本のご案内／「出前教学講座」申し込み受付／新刊紹介／平成 29 年度「教学と現代」／平成 30 年度公開教学講座

巻頭言

人材と人財、または人物

おやさと研究所長　高見宇造　*Uzo Takami*

先日、教会本部のある研修会に出席したが、主催者から「じんざい育成の上に活用下さい」という挨拶があった。このごろは少子高齢化の影響か、はたまたわが国の「一億総活躍社会」の呼び声のせいか、「じんざい」という言葉を今まで以上に見聞きするようになった。この「じんざい」は普通に考えれば「人材」と思っていたが、最近もう一つ、「人財」があることを知った。ご存知だろうか。経営コンサルタントの村山昇は、この違いをダイヤモンドに例えて話をしている。ダイヤモンドは高価な宝石として取り引きされる一方で、研磨材市場でも大量に取引されることをあげて、前者は「財」としての価値が扱われ、後者は「材」としての価値が扱われているという。その区別は「代替がきくかきかないか」であるというのだ。(『プロセスにこそ価値がある』メディアファクトリー新書、2012 年)

この例えで言うなら、「その仕事はあなたにしかできない」となれば、その人は「代替がきかない」ゆえに「人財」であるし、「その仕事はあなたがやっても、他の人がやっても同じこと」となれば「人材」となるのだろう。

またこれに加えて「人物」という言葉もある。「人物」とは「人材」「人財」に注目しつつも、その人柄や「お人なり」に優れた人を意味する。これは「リーダーシップのある魅力的な人」という側面を意識した人間像である。識者は「人材」や「人財」は学校教育で育てられるが「人物」は教育だけでは簡単に育てられないという。さて冒頭の主催者はどの「じんざい」を言われたのだろうか。

申すまでもなく、天理教の「じんざい」は「よふぼく」と呼ばれるが、『天理教教典』第９章には「たすけて頂いた喜びは、自ら外に向つて、人だすけの行為となり、ここに、人は、親神の望まれる陽気ぐらしへの普請の用材となる。これをよふぼくと仰せられる」とある。「用材」であるなら「人材」となるのだが、「おふでさき」には、

いかなるのやまいとゆうてないけれど
みにさわりつく神のよふむき　（四号 25）
よふむきもなにの事やら一寸しれん
神のをもわくやま〳〵の事　（四号 26）

とあるようによふぼくの勤めは「代替のきかない」深い親神の思いがあると言われる。その意味では「人財」である。

『教典』は続けて、「仮令、年限の理に浅い深いの相違があろうとも、教祖ひながたの道を慕い、ひたむきなたすけ一条の心から、あらゆる困難を乗り越え、温かい真心で、一すじにたすけの道に進むなら、何人でも、親神の守護を鮮かに頂くことが出来る」と、その能力よりも、「じんざい」となる過程に重きが置かれていることが分かる。またその資質すら問われない。

「おさしづ」には、「よふぼくと言えば普請何ぼどれだけ綺麗なと言うても、若いもの細いものでは持たぬ。年限経ったものなら何ぼう節が有っても歪んだものでもこたえる。重りがこたえやで」（28・10・7）と言われている。これが私達の信仰の世界である。

ところで法隆寺の昭和大修理を行った宮大工棟梁・西岡常一氏は『木のいのち 木のこころ』（草思社、1993 年）で、「癖の強いやつほど命も強いという感じですな。癖のない素直な木は弱い。力も弱いし、耐用年数も短いですな」と素材の持ち味を活かすことが育成する人間の責任だと言う。

このきいもたん〳〵月日でいりして
つくりあけたらくにのはしらや　（七号 17）

とあるように「国の柱」ともなる者を育てるのが天理教の「じんざい」育成であるなら、それはまさに「人物」を育てることなのだろうか。もう一度、その当たりのことを考えてみる必要がありそうだ。